

## 月の花挽歌 ～3.月光値千金～

### 3-5

「え？あ、どこかで聞いたセリフ……」

「血筋は争えませんか」

麻里子は含み笑いをして、空いた二つのグラスに酒を注いだ。

「明るいうちから酒飲む女♪爛より冷が似合います♪」と真紀は不意に歌いだした。

「自生のキノコでジコボウと言います。季節と一緒におろし和えで一献。秋を食べてや」

麻里子も二代目桂枝雀の得意演目『一人酒盛り』をもじって言葉遊びに興じた。

「あなたもキンちゃん！」と江戸女が噺家の符牒を使うと、

「どさ金」と信州女も符牒で返した。

「チョット待って、チョット待って。こう言う戯者は、私がペンペンしますよ」と江戸女が艶っぽく才弾ける。

「兄が企画して、酒蔵で落語や音楽のミニライブを、定期的にやっていました。私が杜氏になってから、もろみ工程や貯蔵工程でクラシックを流しているのが切っ掛けだったようです。酒蔵の音響効果は中々のものですから。そんなことから、私は落語にハマリ、兄はチェロにハマりました」と信州女は急に語調を落として、勢いを修正した。

会話が壺にはまると、トコトンまで興に乗らないと気が済まない男を、潮時をみてセーブしてきた真紀は、「それって、私の役回り……」と思わず不平をもらしていた。

「役回り？」

「あら、ごめんなさい。気を悪くなさらないで。今ね、私が昌幸さんで、麻里子さんが私だったの」

「……」

「いつもブレーキ役だった私が、今日に限ってアクセルを踏み込んでいたから」

「あ、そう言うことですか。了解です。きっと、兄も我慢できなくなって、真紀さんを通して喋っているのかもしれませんがね」と素直に頷いた麻里子は、「ちょっと失礼します」と断って退室した。

いつの間にか部屋の明かりがついていた。

薄暮が染めかけている庭を、ぼんやりと眺めていた真紀は、思いあまる空間移動に気圧されながらも、これは恋した男の贈り物に違いないと得心することにした。

グラスを一つと小袋を手にして戻ってきた麻里子は、何のてらいもなく、「兄の分も注いでやってください」と言ってグラスを差し出した。

改めて乾杯をすると、「これを、お納めください」と麻里子は小袋からチェス駒のストラップを取り出した。

「え？」

「兄が残した品です」

「これを私に？」

真紀は返事に窮しながらも、目の前で楽しげにしている麻里子は、いったい会社の経営実態をどこまで把握しているのだろうかなどと心情をおもんばかりつつ、これも男のメッセージなのかと居心地の悪さを感じていた。